さかまた

2008.7
NO.71

シーワールド生まれのバンドウイルカたち

▲「イルカの海」はにぎやかに
現在は3頭の子イルカが母親や他のイルカと生活している

鴨川シーワールドでは、1970年のオープン以来これまでに25頭のバンドウイルカが誕生しています。そのうちの11頭は1998年に繁殖を目的として建設された施設「イルカの海」で誕生し、現在飼育中の20頭のバンドウイルカのうち、10頭が当館生まれのイルカです。今回は、そんなシーワールド生まれのイルカと、その母親たちにスポットを当ててみたいと思います。

■「イルカの海」出産第1号!

「イルカの海」オープンの翌年にこの施設では初めてとなる出産がありました。母親は「ノーマ」で、今まで3頭の子どもを出産したイルカです。それから40日後にはそれまで6頭を出産したベテランの「スリム」が出産し、2頭の子イルカたちは元気に育っていきました。

「イルカの海」では、地下にある水中観覧窓を通して、それまで見ることが難しかった水中の様子を観察できるようになりました。「スリム」と「ノーマ」の事例では、出産前には体を上下に反らせる陣痛行動があることや、破水の確認ができました。子イルカがお乳を探しながら泳ぐ探乳行動、授乳のパターンや母子の睡眠行動、後産の排出など、一連の行動を詳しく知ることが可能となりました。また、これまで文献や標本からでしか知ることができなかった、生まれたばかりの子イルカのくちばしにはヒゲが生えていることや、体表の変化なども明らかとなりました。あわせて、子イルカの栄養状態や排泄などの飼育上重要な情報が得られ、以後の出産や育児、子イルカの成長に関する基礎データとなりました。

日本近海の野生バンドウイルカの研究では、3年ごとに出産することが明らかになっています。また当館では2.5～3年ごとに出産することや授乳の観察から、子イルカは3年間を母親と共にすごした後、母親や他個体との関係、健康状態や成長などを見て、親離れの時期を判断することにしました。その結果、この2頭の子イルカは、3歳になった2002年12月に、沖縄美ら海水族館に旅立っていきました。

▲昼間の出産はお客様の目の前で

▲イルカの赤ちゃんにはヒゲがある

■初産の2頭も成功!

その後は、交尾行動が確認され、ホルモン検査や超音波診断により妊娠が確定したイルカは、出産にそなえて「イルカの海」に移動することとし、2002年1月に「リンクス」、2003年8月に「ビーナ」が出産をしました。この2頭は初産と思われましたが、立派なお母さんぶりを発揮してくれました。「スリム」や「ノーマ」は、母親が休んでいる時には子イルカと一緒に泳ぐなど、活躍してくれました。「リンクス」と「ビーナ」は子イルカが2歳になる頃から、隣のプールで行われる、お客様にイルカとふれあっていただく「ラブリードルフィン」に参加するようになりました。いわば子育てをしながらのパートタイムですが、自分たちの仕事をしっかりとこなしてくれました。2頭の子イルカは3歳になるとパフォーマンス出場をめざし、イルカパフォーマンスプールがある「サーフスタジアム」へ移動されました。担当トレーナーは、母親代わりを兼ね、健康管理により細かな注意をはらいながらトレーニングを進めていきました。そして子イルカたちは、2006年7月と2007年7月にパフォーマンスに出場することができました。

▲ラブリードルフィンに参加する「ビーナ」

■人工授精によるイルカの誕生

2003年7月と2004年7月に鴨川シーワールドにとって大きなでき事がありました。かねてより研究が進められていた人工授精に成功したのです。

「スリム」が新鮮精液を用いた人工授精で、「ノーマ」が凍結精液を用いた人工授精で出産しました。人工授精技術が成功したことは、飼育頭数が少ない種類や移動が難しい大型種への応用が期待でき、新しい時代の幕開けとなりました。

日本で初めて生まれた人工授精ベビーは「太陽が照り輝く」の意を込め「サニー」と名づけられ、現在も「イルカの海」で生活しています。

▲「ノーマ」と人工授精で生まれた「ウィル」

■働くママさんイルカたち

2005年6月と8月には「カリーナ」と「アクア」があいついで出産しました。この2組の親子では新しい試みを行い、子イルカが2歳の時に、親子で「サーフスタジアム」に移動しました。母親は、子イルカを予備プールに残してパフォーマンスに出場し、終了すると子イルカが待つプールにもどります。パフォーマンスプールは、予備プールに隣接し、水門によって仕切られています。通常はパフォーマンスに影響がないように、水門は扉を閉めていますが、扉でなく柵で仕切るようにして、パフォーマンス中でも母子がお互いに確認ができるようにしました。初めのうちは気になって、親子が水門から離れずにいたり、子イルカが母親と一緒にパフォーマンスプールに出てしまうアクシデントもありましたが、今では、パフォーマンスに出場する母親を気にすることもなくお留守番をしています。

「スリム」や「ノーマ」を始め、母親とその子どもたちで構成されるバンドウイルカの繁殖群。その中で生活をし、協力して子育てをする、にぎやかな「イルカの海」。そこで元気に遊びまわり成長し、社会生活を学習し、巣立っていく子イルカたち。これからは「イルカの海」で生まれた子イルカたちが大人にまで成長し、3世代目の繁殖に成功して自分たちの親のようにがんばってくれることを期待しています。鴨川シーワールドのイルカファミリーを、これからも応援してください。

(川崎 遼平)

『イルカの海』で生まれたバンドウイルカ

母 親	父 親	子イルカ	出生年月日	性別	
ノーマ	レグルス	レマ	1999.8.22	メス	2002年12月、沖縄美ら海水族館へ移動
スリム	レグルス	スカイ	1999.10.1	オス	2002年12月、沖縄美ら海水族館へ移動
リンクス	レグルス	リキ	2002.1.18	オス	5歳よりパフォーマンスで活躍
スリム	レグルス	サニー	2003.7.17	メス	日本初の人工授精ベビー、ラブリードルフィン訓練中
ビーナ	マース	ルナ	2003.8.16	メス	4歳よりパフォーマンスで活躍
ノーマ	レグルス	ウィル	2004.9.21	オス	日本初の凍結精液による人工授精ベビー(2005年12月死亡)
カリーナ	マース	カイル	2005.6.20	オス	「サーフスタジアム」でパフォーマンス訓練中
アクア	マース	マリア	2005.8.9	メス	「サーフスタジアム」でパフォーマンス訓練中
ビーナ	レグルス	ビート	2006.7.9	オス	哺育中
ノーマ	レグルス	ノエル	2007.1.19	メス	哺育中
メル	マース	メリー	2007.6.13	メス	哺育中

ラッコの輸送

▲展示プールでの新しい生活が始まった
左から「ロッキー」「モン」「チャサリー」

当館では、メスの「モン」１頭での飼育が続いていましたが、3月3日、新たに2頭が仲間入りしました。このラッコたちは、和歌山県の太地町立くじらの博物館で飼育されていたオスの「ロッキー」とメスの「チャサリー」で、繁殖を目的に当館に搬入されました。

神経質なラッコはストレスに弱く、オリへ収容しトラックに運ぶなどの急激な環境の変化や輸送中の騒音や震動、到着後の新施設への搬入など一連の作業中に興奮状態が続き、体温が上がりショック症状を起こすことがあります。そのため、輸送中は細心の注意が必要で、可能な限りストレスを少なくしておちつかせるようにしながら、状況の変化を注意深く観察し迅速に対応をしなければなりません。エサや氷を定期的に食べさせておちつかせ、スプレーで後肢に水をかけて体温の上昇を防ぎ、排泄物で汚れた場合は、体毛を洗ってきれいにするなど、担当係員がつきっきりで世話をしながら輸送します。

▲輸送用のオリに入れられた2頭のラッコ

気温10℃に冷却したトラック内での15時間は、とても長くて不安な時間でしたが、くじらの博物館のみなさんのご協力を得て無事に搬入することができました。プールできもちよさそうに毛づくろいをする２頭の姿を見ていると、そんな苦労も忘れてしまいます。

▲トラックで鴨川に到着

▲予備槽に運び込まれたラッコ

（小林　夕希栄）

ミナミバンドウイルカを放流

▲コンテナボックスから海に放されるミナミバンドウイルカ

昨年の7月に鴨川沖の定置網に迷入し保護したミナミバンドウイルカは、御蔵島周辺海域に生息していた個体であることが判明しました。日本の沿岸海域に生息するミナミバンドウイルカの生活圏の範囲や移動に関する情報は少なく、今回、本個体の放流に際し、衛星標識を装着して移動経路を追跡する試みが、沖縄美ら海水族館・三重大学・日本鯨類研究所との共同研究で行われました。

大きな波にゆれる不安定な船上で、背ビレに装着した標識に影響をあたえずに、いかに迅速かつ安全に放流できるか検討を重ねた結果、イルカを専用のコンテナボックスに乗せたまま海面近くまで下ろし、前の扉を開きそのまますべり出す方法に決定しました。その他考えつくあらゆる状況にも対応できるよう万全の準備を整え、シミュレーションをくり返しました。

3月25日、鴨川市漁業協同組合の協力を得て、鴨川沖20kmの海域で、私たちスタッフや研究者の方々が見守る中、ミナミバンドウイルカを無事放流することができました。その後の衛星による追跡の結果、イルカは房総沖から北上して、常磐・三陸沖まで確認できましたが、このデータをもとに実際の移動コースや速度を現在、検討しています。

▲放流を待つミナミバンドウイルカ

▲漁港でシミュレーションを重ねた

▲背ビレにとりつけられた衛星標識

（井上　聡）

モラモラ

冬の定番！「シーワールド・イルミネーション」

鴨川の夜の風物詩としてすっかり定着した「シーワールド・イルミネーション」が、11月1日～1月6日の間、開催されました。

5回目となる今回は、正面ゲート全体を海のイメージとしてブルーにいろどり、その中を泳ぐシャチファミリーを中心に、バンドウイルカ・ベルーガ・マンボウ・オウサマペンギンなどの海の動物たちがとりかこむ演出としました。今回初めて登場した光り輝くシャチのドームは、中に入って不思議な体験をすることができ、ちびっ子たちは大喜び。わざわざ車を止めて立ちよる方も多く見られ、シーワールドならではの幻想的なイルミネーションは大好評でした。

（村松　政之）

カクレクマノミの稚魚展示

トロピカルアイランドの稚魚水そうでは、当館生まれの稚魚を展示していますが、12月～4月の期間、アニメ映画で人気者になったカクレクマノミの稚魚を展示しました。これまでにカクレクマノミの繁殖は2回成功していましたが、いずれも数尾しか成育しなかったため、稚魚を展示することはできませんでした。そこで、エサを変更して親の栄養を強化するとともに、共生するイソギンチャクの近くに平らな石を置いたところ、連続して産卵が行われました。そして、その石ごと別の水そうに移動し、50尾ほどの稚魚がふ化し、小さなカクレクマノミがきもちよさそうにイソギンチャクによりそう姿を、ご覧いただくことができました。

（古市　敦子）

トレーニングセミナーと海獣技術者研究会

12月4日～6日の3日間、全国の動物園・水族館からあわせて114名の関係者が集まり、第4回海獣類トレーニングセミナーと第33回海獣技術者研究会が当館で開催されました。トレーニングセミナーには、日本を代表する鷹匠やチンパンジー、クマのトレーナー、鯨類の研究者をお招きし、トレーニングに関する講演をしていただき、海獣類のトレーナーたちとの様々な討議がなされました。海獣技術者研究会は、海獣類の飼育調教技術の向上と情報交換の場として毎年開催されている研究会で、今回も日ごろの飼育を通じて得られた研究成果の発表とそれに対する活発な意見交換が行われ、参加者間の交流も深められた有意義な3日間でした。

（勝俣　浩）

干支の生き物特別展示

今年もお正月恒例、干支にちなんだ特別展示「2008年干支（子）～ネズミの名がつく生き物たち～」を開催しました。今回は、種名に「ネズミ」がつくネズミフグやネズミゴチ、漢字で書くと「鼠」がつくナマコ（海鼠）やネズッポ（鼠坊）の仲間のトビヌメリ、中国語で「鼠」がつくサラサハタ（老鼠斑）やコウワンテグリ（老鼠）など7種30点の海の生き物を展示しました。中でも1番の人気はネズミフグで、かわいらしい顔とお客様目線でよってくる人なつっこいしぐさが注目の的でした。また、ナマコを漢字で書くと「海のネズミ」になることに気づかれた方もいらっしゃったようで、今年の干支の展示は多くの方にチュー目されました。

（吉村　智範）

親子でStudy

な・ぜ・な・ぜ・相・談・室

表紙説明　カクレクマノミの稚魚
撮影:中村庸夫